

2019 年 1 月 23 日

## 「博士学位請求論文」 審査報告書

審査委員（主査）文学部専任准教授

氏名 湯 浅 幸 代 ㊞

（副査）文学部専任教授

氏名 小 野 正 弘 ㊞

（副査）東北大学名誉教授

氏名 仁 平 道 明 ㊞

1 論文提出者 氏名 クルボノヴァ・グルノザ

## 2 論文題名

（邦文題）『源氏物語』の女性描写と表現—ウズベク語訳に向けて—

（欧文題）Descriptions and Expressions of Women in The Tale of Genji: Towards an Uzbek Translation

## 3 論文の構成

本論文の具体的な章立ては、以下の通りである。

凡例

序章 研究の目的と本論の構成

- 一 研究の背景と目的
- 二 研究の方法—翻訳のための研究の重要性—
- 三 本論の構成

第一部 女性の表現と女子教育・教養について

第一章 桐壺更衣と藤壺の人物造型再考

はじめに

- 一 桐壺更衣と藤壺についての先行研究
- 二 「なつかしうらうたげ」以外の新たな女性像
  - 二-一 桐壺更衣
  - 二-二 藤壺
- 三 藤壺像の再検討
  - 三-一 理想的な女性としての造型
  - 三-二 聡明な女性としての造型

おわりに

## 第二章 『源氏物語』における「やはらかなり」

はじめに

- 一 『宇津保物語』『落窪物語』における「やはらかなり」
  - 二 『源氏物語』における「やはらかなり」
  - 三 『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『狭衣物語』における「やはらかなり」
  - 四 考察
    - 四 - 一 紫の上と「やはらかなり」
    - 四 - 二 「やはらかなり」と連動する「なまめく」「なつかし」
- おわりに

## 第三章 光源氏による紫の上の教育

はじめに

- 一 研究史の概観
- 二 紫の上の登場
- 三 紫の上の養育と成長
- 四 手習いと紫の上像—玉鬘と比較して
- 五 光源氏の理想と紫の上像

## 第四章 光源氏による明石の姫君への「后がね」教育

はじめに

- 一 「后がね」教育に関する先行研究
- 二 明石の姫君の「后がね」教育
  - 二 - 一 手習いの教養について
  - 二 - 二 音楽の教養について
  - 二 - 三 和歌の教養について
  - 二 - 四 物語の選定について
- 三 姫君の「后がね」教育と桐壺院

おわりに

## 第五章 宇治の大君造型

はじめに

- 一 大君研究史概観
- 二 宇治の姉妹
- 三 「静かなり」語について
- 四 「重りかなり」語について
- 五 「気高し」語について
- 六 大君の人物像—中の君との比較において

おわりに

## 第二部 『源氏物語』をウズベク語に翻訳するための基礎的研究

### 第六章 海外における『源氏物語』の受容と翻訳

はじめに

- 一 海外における『源氏物語』の受容
- 二 海外における『源氏物語』の翻訳
- おわりに

## 第七章 ウズベキスタンにおける『源氏物語』の受容とウズベク語訳の意義

はじめに

- 一 ウズベキスタンの日本語教育と『源氏物語』受容
- 二 ウズベク文学と『源氏物語』
- 三 ウズベキスタンの言語と日本語

## 第八章 ウズベク語訳の可能性と諸問題―「桐壺」巻試訳―

はじめに

- 一 翻訳の問題に入る前に
- 二 作品名・巻名の翻訳
- 三 「桐壺」巻のウズベク語訳―翻訳の具体例
- 四 和歌の翻訳問題について

おわりに

## 終章 研究の成果と今後の課題

初出一覧

博士論文参考文献

## 4. 論文の概要

本論文は、『源氏物語』の作品研究とウズベク語訳のための翻訳研究という二部から構成されている。まず第一部では、『源氏物語』のすぐれた女性描写、女性たちの生き方や彼女たちが抱く感情の一端を、用いられる美的語彙の検討、及び物語に描かれる女子教育のあり方から考察する。これらの研究は、『源氏物語』をウズベク語訳するための基礎作業となっている。また第二部では、翻訳に際し、これまでの海外における『源氏物語』評価、翻訳本の特徴、及び問題点について言及し、目指すべきウズベク語訳のあり方を明確化する。さらにウズベキスタンの文化・文学・言語の違いに留意しながら、実際に桐壺巻の試訳を実践し、今後の課題について言及する。

第一章では、桐壺更衣と藤壺に共通して用いられる「なつかしうらうたげ」に注目する。従来の研究では、この言葉が二人の美的本質とされ、源氏が女性に希求する母更衣的な面影として、藤壺・紫の上・夕顔の人物像と関連付けて論じられてきた。論者は、検討の結果「なつかしうらうたげ」とどまらない両女性の新たな人物像の魅力を提示する。桐壺更衣については、帝の視点が重視されるが後宮の後妃や帝付きの女房の視点に着目し、穏やかでやさしく、人に情愛深い思いやりの心を本性とする、後宮における人間の美しく魅力的な女性像を指摘する。藤壺の場合は、非常に聡明な女性でありながら、才たけたところを見せず、穏やかでおっとりとする振る舞っていたところが人柄の大きな魅力であり、源氏が好んだ女性のあり方である。その上、源氏がほかに並ぶものがないほどすぐれていると賞賛している気質は、藤壺の「深うよしづきたる」面であった。このような藤壺像こそは、源氏が生涯、紫の上をはじめ多くの女性に希求した理想的な女性のあり方であったと考察している。

第二章では、「やはらかなり」について論じる。『源氏物語』における「やはらかなり」は男性の視点から、彼らが女性と接する際に好ましいとした女性のあり様を示している。特に、源氏自身と源

氏の「家」の男性が「やはらか」な性質の女性に魅力を感じ、そのようなものやわらかでおうような女性のあり方を好ましいとしていた点、特徴的である。一方、源氏が幼い時分から引き取り、自ら理想的な女人に養育しようとした紫の上に対しても、早々に「女は心やはらかなるなんよき」と教訓し「心やはらか」な女性に仕立てようとしていたにもかかわらず、彼女の人物像には「やはらかなり」の形容が見られない。紫の上は、源氏が望ましいとするほどのものやわらかで穏やかな性質の女性ではなかったことを指摘している。

第三章では、「手習い」教育に着眼して、理想的な女人として源氏自ら養育した紫の上の人物像について考察する。「手習い」によって、紫の上の美しい成長過程がかたどられ、彼女のすぐれたあり様は周囲からも認められる。「手習い」は、源氏によって養育された紫の上の理想性と彼自身の教育の立派な成果に対する自負心を語る手段であった。しかし、理想の女性に仕立てようと大切に養育した紫の上には、心の不満や嫉妬などの感情をさらけ出す面があり、また利発さ、気のきかぬところが勝ち過ぎていた。そのような紫の上の性質を、源氏は人物像の難点として望ましくないと批判する。このように、紫の上は源氏の養育から外れ、個性的に育っていたことを明らかにする。そこには思い通りの理想的な女性を養育することの限界が見える。紫の上の人物像とは、源氏が理想とする女性像を越えて、物語の理想的な女性のあり方であったことを述べる。

第四章では、「手習い」「音楽」「和歌」と「物語の選定」を軸に、源氏による娘・明石の姫君への「后がね」教育について考察する。姫君の「后がね」教育は、すべての物事に片寄りなく通じさせ特に目立つような才気・特技も付けさせず、一方あぶなげで不案内な面も持たせないような、ゆったりとした中庸を重んじる教育方針であった。このような源氏による姫君教育は、父桐壺院から受けた教育の方針を本とし、それに紫の上や養女玉鬘などの教育から得た経験と、さらには豊かな女性関係における失敗や反省によって築かれたものであったことを明らかにした。姫君教育は、源氏をもっとも望ましいとする女性を教育するための教育方針であった。

第五章では、大君を形容する「静かなり」「重りかなり」「気高し」の語彙に着目し、その人物像と生き方との連関性を検討する。物語の誰よりも重々しく、静かに落ち着いて、控えめで慎重な大君の人物像の深奥に男を拒み通す芯の強さが秘められていることを明らかにする。また、妹の中の君に比べて、大君は高貴な家柄の出身であることへ意識が強く、気位の高い女性であった。そこに、八の宮家の長女としてふさわしい大君の人物像が窺え、宮家の長女としての生き方が導かれていることを考察する。

第六章では、『源氏物語』をウズベク語に翻訳する意義を説くため、まず海外における明治から現代までの物語の受容の歴史と『源氏物語』批評のあり方、多様性、その変容過程について概観した。さらに、これまで海外に出版された『源氏物語』の外国語訳について、主にウズベク語訳を行う際、参考にする英訳とロシア語訳を中心に確認する。

第七章では、ウズベキスタンの『源氏物語』の受容と翻訳の現状について言及する。紫式部など、女性が多く活躍した平安時代にあたる世紀において、ウズベク文学の担い手はみな男性である。ウズベク文学における最初の女流文学は、平安時代をはるかに下る十八世紀にあらわれたJahon otinUvaysiy (ジャホン オティン ウヴァイシー (1780 - 1845)) とNodira (ノディラ (1792 - 1842)) という詩人による詩であった。「詩の国」・ウズベキスタンでは、著名な女流詩人・歌人はあらわれるが、国内外で認知され、読まれている文学作品を綴った女流作家はおらず、『源氏物語』のような散文形式の長編小説もない。さらには、一夫多妻的内容の文学作品も、そこに生きる様々な女性たちのあり様や生き方、彼女たちの心情を細緻に描く物語はウズベキスタンには見られない。このようにウズベク文学との比較、国の社会的背景、さらにウズベク語の言語系統や言語構造の点から、『源氏物語』の研究、およびウズベク語に翻訳する意義を論じる。

第八章では、まず、翻訳作業の一つの課題でもある充実した「日本語—ウズベク語」の辞書・事典の問題を取り上げる。次いで、翻訳の文体、語り手や草子地の翻訳問題、作品名や巻名の翻訳、それと関連して、自然景物や人物呼称の翻訳問題、さらに和歌の翻訳方法などを中心に、ウズベク語訳を行う際に生じる諸問題の特徴と解決方途について考察する。これらの諸問題を踏まえて、桐壺巻の試訳を示す。

以上、本研究において、女性の描写・表現を軸に原文を広範かつ丁寧に読み、正確に解釈する方法を提示したことは、正確かつ文学性のある *Genji qissasi* (タイトル『源氏物語』のウズベク語訳) を完成させるための基盤になるのである。

## 5. 論文の特質

本論文の特質は、以下の4点にまとめられる。

- (1) ウズベク語訳の実現にあたり、『源氏物語』の女性描写(人物表現・女子教育)を中心とした作品研究と、ウズベク語訳のための基礎研究の二部構成がとられている。これまでの翻訳者とは異なり、より原文への深い理解に根ざした上で、海外の『源氏物語』評価、また各翻訳本の特徴・問題点を指摘し、目指すべき翻訳のあり方が明確に示されている。
- (2) 翻訳作業のための作品読解に終始せず、女性視点という立場から、新たに女性登場人物の特徴を複数の語彙(主に美質を示す表現)検討等により明らかにしている。論者が翻訳によって自国の国民に知ってほしい「女性の生き方」が、適切に原文から読み取られ、さらに日本の中世から現代に至る膨大な先行研究を精査した上で、新たな女性像の提示、女性登場人物への理解が見られる。
- (3) 史上初となる『源氏物語』のウズベク語訳が試みられている。中央アジアに位置するウズベキスタンでは、ソ連からの独立による国家主導の「ウズベク語」化政策のため、特に若い世代の中でロシア語による日本語教材を理解できない人が増えている。その点でも作品のウズベク語訳は画期的である。
- (4) 文化の違い、また時代差のある翻訳の難しさについて、明快に解決すべき問題点が提示されている。ウズベキスタンという国の文化、文学、言語の特徴、日本語教育の現状も明らかにされており、翻訳の具体的な実践が示されている。

## 6. 論文の評価

前節において記した特質は、そのまま本論文の評価に通じる。まず作品研究としては、中世から現代に至る先行研究を適切に踏まえた上で、女性描写についての語彙研究における男性視点の偏重を指摘し、改めて女性視点の有効性を確認した点、評価できる。たとえば語彙の一つ「やはらかなり」の検討については、当該作品だけでなく、前後の作品における用例を広く検討した上で、『源氏物語』では「やはらかなり」が、男性に都合のよい女性観、女性の危うげな特性を示す場合があり、単に女性の理想性や性的な魅力を示す語ではないことを証明している。また主人公・光源氏が、将来の妻となる紫の上に施した教育についても、その特徴を「手習い」に認め、宿命の恋人である藤壺のような理想の女性に育てようとするも、それとは異なる美質(源氏にとっては困る嫉妬の癖)を発揮する紫の上の教育について、限界のあったことを指摘している。

またこのような作品研究を経た第二部では、『源氏物語』のウズベク語訳を行うにあたり、海外での『源氏物語』評価、翻訳本の問題に言及し、自らの目指すウズベク語訳のあり方を明確化した。さらに翻訳する上での文化的・言語的諸問題についての考察は、これから平安時代の古典作品を他言語に翻訳する訳者にとって重要な指標となるはずである。特に「試訳」という形で、物語の冒頭となる桐壺巻の一部を翻訳し、自然景物呼称の問題、文体・敬語の問題、和歌表記の問題など、他の翻訳を並べて比較参照しつつ、ウズベク語訳を実践している点、高く評価できる。

以上のように、本論文の意義は大きいが、以下の問題点もある。

まず、作品研究においては、第二・三章に記される紫の上のあり方について、妻妾の地位という視点からの考察がないこと、また第四章における明石姫君の「后がね」教育について、当時、後の教養として重視されていた漢籍教育への言及がない点、今後の課題となる。

また第二部のウズベク語訳における基礎的研究では、旧来の言語系統の考え方が用いられており、改める必要がある箇所が見受けられたこと、作品研究において実際に分析された語彙のウズベク語訳の論がないことも課題である。

このように、本論文には、若干の不備もあるが、部分的な欠点であり、研究全体の意義を損なうものではないと考える。

## 7. 論文の判定

本学位請求論文は、文学研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（文学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以上